

Title	<紹介>蜂矢真郷著『古代語形容詞の研究』
Author(s)	伊藤, 由貴
Citation	語文. 2014, 103, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70944
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

蜂矢真郷著『古代語形容詞の研究』

伊藤由貴

本書は上代の形容詞について全体をとらえて論じた書き下ろしの総論篇と既発表論文に加筆修正を施して構成された各論篇より成っている。著者自身がしがきにおいて「本書は、ある程度概説的な総論篇と、それぞれの論からなる各論篇との組合せによって成り立っている。恐らく、その一方だけでは一冊の本の形をとり得なかったのではないかとも思われる。」と述べるように、総論篇と各論篇は関連しあい、各論篇における細やかな語一つ一つの考証が総論へと結実している。目次は次の通りである。

総論篇

第一章 形容詞の活用等と語構成

- 第一節 形容詞の活用表／第二節 形容詞語幹の用法／第三節 ク活用形容詞とシク活用形容詞との意味的差違／第四節 語構成から見た上代の形容詞

第二章 特徴のある形容詞群

- 第一節 両活用形容詞／第二節 重複形容詞・並列形容詞／第三節 ナシ型形容詞／第四節 タシ型形容詞／第五節 ケシ型形容詞／第六節 ジ型形容詞／第七節 名詞（・数詞）・動詞連用形・副詞（・感動詞）＋シの派生形容詞／第八節 動詞被覆形＋シの派生形容詞

各論篇

第一章 形容詞の対義語

第一節 多少と大小／第二節 ヒロシ「広」とサシ「狭」・セバシ「狭」／補節 一音節被覆形―露出形のアクセント

第二章 両活用形容詞の周辺

第一節 フトシ「シク活用」の成立／第二節 ウマシクニとウマシククニ／第三節 セバシ「シク活用」の有無

第三章 重複形容詞の周辺

第一節 重複形容詞と単独の形容詞／第二節 形容詞スガシ「清」の成立／第三節 ク活用形容詞語幹の重複・並列から

第四章 形態上の特徴を持つ形容詞

第一節 語幹末がイ列のク活用形容詞／第二節 一音節語幹の形容詞

総論篇は古代語の形容詞全体をとらえて論じられる部分である。概説的な性格も併せ持ち、先行研究において形容詞がどのように論じられてきたか、どのような問題点があるのか等が他分野を専門とする者にもわかりやすく述べられている。第一章第一節から第三節では、ク活用とシク活用の種別を軸に、活用の差異、語幹の用法の差異、意味的な差異について述べられ、シク活用の発生・発達がク活用に遅れたとみられることに話が及ぶ。第四節では上代の形容詞が語構成の観点からどのように分類できるかが示され、ここでの分類が、第二章やそれに続く各論篇の構成の基礎となっている。第二章は特徴のある形容詞が取り上げられ、それ

ぞれが持つ問題点が示される。

各論篇は、総論篇で問題や特徴があると指摘された語の一部について詳しく論じられ、それぞれの節が一つの論になっている。中心となるのは古代語であるが、節によっては近代語・現代語の形容詞まで広く扱われる。第一章では対義的な語について取り上げられる。第一節ではオホシースコシ・スクナシを軸に論じられる。上代では「大」「多」の両方の意味に用いられていたオホシが、オホシ「多」とオホキナリ「大」に分化する。その一方で、「小」「少」の意味に用いられたスコシは、スコシ「少」とスコシキナリ「小」に分化していったものの、強調形のスクナシの成立やチヒサシの存在が影響し、オホシの分化とは対応しなかったことが示される。また、第二節では、ヒロシとサシ・セバシを軸に、母音交替の関係にあると見られる語などを合わせて考察すること、語の広がり方が非対称であることが示される。第二章は両活用形容詞に関するものが取り上げられる。第一節ではフトシのシク活用について、ク活用形容詞語幹フト+動詞シクのフトシク、フトシキが形容詞と混同されて成立したことが示され、第二節は萬葉集の《怜何國曾》の訓について先行研究で示されるウマシクニソとウマシクニソの二種のうち、前者が適切であるということが他の両活用形容詞の状況から述べられる。第三節ではセバシのシク活用と説明されてきた用例が実はセハシとの掛詞やセハシそのものと解釈し得ることを示した上で、セバシのシク活用の例がないことを述べる。第三章では重複形容詞について第一節で語

構成の観点からの分類が示され、第二節では、形容詞スガシが一見重複形容詞スガスガシからの形成されたものであるかに見えるが、そうではなく古事記歌謡のスガシメが近代にはいつて形容詞と解釈され用いられるようになったことが示される。第三節では重複形容詞の延長線上に並列形容詞、ウス+形容詞の複合、ウ斯拉+形容詞の複合があることが情態副詞と合わせて示される。第四章では形態上の特徴による問題を持つ形容詞が取り上げられ、第一節では、語幹末がイ列のク活用形容詞がありにくいことから数少ない例が語幹をウ列に変化させたり、シク活用になったりすることでありにくさを解消することや、時代が下がるにつれてそのありにくさが破られること、第二節では一音節の形容詞語幹が特定の語幹の用法をとる際、安定を求めて二音節化することがあるが、それらの語それぞれに二音節化の要因が内在していたことが論じられる。

総論篇・各論篇共に多数の語が取り上げられ、巻末の語句索引は三十一頁に及ぶ。またそれらの語句一つ一つが十分に検討された確実な用例を伴って示され、頑丈な礎の上に論が組立てられていることがよくわかる。個々の語に対する緻密な検討・考察が集積することで語彙の全体像が明らかになり、語彙史が描き出されるのだということを思い知らされる一冊である。

（清文堂、二〇一四年五月、三九三頁、一一、〇〇〇円）

（いとう・ゆき 本学大学院博士後期課程）